加藤紘一氏ヒアリングの趣旨

自由民主党衆議院議員の加藤紘一氏は72年の初当選以来、連続13回の当選を重ね、旧防衛庁長官、内閣官房長官、同幹事長などの要職を歴任した自民党の重鎮である。特に、91年11月、第一次宮澤政権発足と同時に官房長官に就任すると、92年12月（第二次宮澤政権）に自民党幹事長代理、94年７月（村山政権）に党政務調査会長、95年９月から98年７月まで（村山政権から橋本政権終わりまで）党幹事長を務めるなど、政局のキーマンのひとりとして活躍し、数々の政策決定の過程や裏側に立ち会ってきた。

おりしも官房長官就任時は、その前年に実施された総量規制導入と急激な利上げによるバブル経済の崩壊が国民の間にも広く実感され始めた頃であり、政調会長から幹事長にかけての時期には、日本経済はディスインフレ状態に陥り、やがてデフレに突入していく。

92年８月、株価下落が続く中、宮澤首相は東証の一時閉鎖や公的資金導入を示唆したが、官房長官として首相の身近にいた加藤氏に当時の印象深かった出来事などを伺う。また、加藤氏は幹事長代理・政調会長・幹事長在職時代、住専問題の処理に深くかかわり、６８５０億円の財政支出を含む住専処理法案成立にも当事者として関与した。とりわけ、住専処理における農林系金融機関の預金者保護や負担軽減措置実現の経緯については、加藤氏自身が農林族のリーダーだったこともあり、詳しく知る立場にあった。当時のエピソードを振り返っていただきながら、バブル崩壊後の処理についても総括していただく。

加藤紘一氏略歴

	加藤紘一氏年譜	関連出来事年表
1939年(昭和14年)	誕生	
1963年(昭和38年)	外務公務員上級試験合格	
1964年(昭和39年)	東京大学法学部卒業、外務省入省、在台北大使館勤務	
1966年(昭和41年)	在ワシントン大使館勤務	
1967年(昭和42年)	ハーバード大学修士課程修了、在香港総領事館副領事	
1969年(昭和44年)	外務省アジア局中国課次席事務官	
1971年(昭和46年)	外務省退官	
1972年(昭和47年)	第33回総選挙、初当選、自民党研修局次長	
1974年(昭和49年)	自民党国際局次長	
1978年(昭和53年)	内閣官房副長官（第一次大平内閣）	
1980年(昭和55年)	第6回サミット（ベネチアで開催）に同行、衆議院議員運営委員会理事、自由民主党国会対策委員会副委員長、自由民主党政務調査会農林部会副部会長	
1981年(昭和56年)	衆議院農林水産委員会理事、自由民主党政務調査会農林部会長	
1983年(昭和58年)	自由民主党総務局長、自由民主党政務調査会総合農政調査会副会長	
1984年(昭和59年)	国務大臣防衛庁長官（第二次中曾根・第二次改造内閣）	

１９８５年（昭和60年）		９月―蔵相・中央銀行総裁会議（Ｇ５）ニューヨークにて開催。ドル高是正の経済政策協調推進で一致（プラザ合意）
１９８６年（昭和61年）	自由民主党政務調査会会長代理	９月―経済対策閣僚会議、総合経済対策を決定（内需中心の景気拡大・雇用の安定などにより、経済の拡大均衡をめざす）（約３兆６０００億円）
１９８７年（昭和62年）	自由民主党政務調査会林政調査会長、自由民主党政務調査会農産物自由化問題等小委員会会長、総合農政調査会会長代理	２月―主要国蔵相・中央銀行総裁会議パリにて開催。黒字国の内需拡大（低金利政策）、為替レートの現水準での安定化を確認（ルーブル合意）。２月―公定歩合引き下げ（３・０％→２・５％・89年５月まで）。５月―経済対策閣僚会議、緊急経済対策を決定（約６兆円）。10月―大暴落（ブラック・マンデー）
１９８８年（昭和63年）		７月―ＢＩＳ中央銀行総裁会議・バーゼル銀行監督委員会「銀行の自己資本比率の国際的統一基準」を決定
１９８９年（平成元年）	自由民主党政務調査会総合農政調査会会長	５月―公定歩合引き上げ（２・５％・87年２月より２年３カ月→３・25％）
１９９０年（平成２年）	衆議院税制特別委員会筆頭理事、衆議院国連平和協力に関する特別委員会委員長	３月―金融機関の土地関連融資の総量規制を示達
１９９１年（平成３年）	内閣官房長官（宮澤内閣）	５月―地価税法公布・一部施行。12月―景気減速・地価急落に対処し金融機関の不動産融資の総量規制の解除決定
１９９２年（平成４年）	自由民主党幹事長代理	６月―金融制度改革法成立。８月―「金融行政の当面の運営方針」12項目を発表。８月―総合経済対策　総額10兆７０００億円
１９９３年（平成５年）		４月―新総合経済対策決定　総額13兆２０００億円
１９９４年（平成６年）	自由民主党政務調査会長	２月―総合経済対策を決定　15兆２０００億円。２月―「金融機関の不良債権問題についての行政上の指針」を発表
１９９５年（平成７年）	自由民主党幹事長	１月―阪神・淡路大震災。３月―東京共同銀行が営業開始。６月―「金融システムの機能回復について」を発表。12月―６８５０億円の財政資金投入を含む住専処理法案決定

	加藤紘一氏年譜	関連出来事年表
1996年(平成8年)		6月―住専処理法など金融6法成立。11月―橋本総理「日本版ビッグバン」を指示
1997年(平成9年)		7月―アジア通貨危機。11月―三洋証券会社更生法の適用を申請。北海道拓殖銀行が北洋銀行への営業権譲渡を発表。山一證券大蔵省に自主廃業を申請
1998年(平成10年)	宏池会会長	10月―日本長期信用銀行の特別公的管理を決定、初の民間銀行国有化。12月―日本債券信用銀行も国有化
1999年(平成11年)		3月―金融再生委員会が大手15行の経営健全化計画を承認（7兆4592億円の資本注入）
2001年(平成13年)	衆院テロ防止特別委員会・委員長	
2002年(平成14年)	自由民主党離党、宏池会会長辞任、衆議院議員辞職	
2003年(平成15年)	第43回衆議院議員選挙、当選、自民党に復党	

第２部　オーラルヒストリーインタビュー⑥

加藤　紘一　氏（元 自民党政務調査会長）

日時　２０１０年３月18日㈭　11時15分～12時50分
場所　衆議院第二議員会館　自民党会議室

バブル崩壊後の不良再建処理と公的資金導入について

【竹中】　宮澤内閣のときに宮澤〔喜一〕首相が不良債権問題についてどう考えていらしたのかとか、住専処理の問題に関して先生の印象に残っていることをお聞かせいただければというのが、今回のインタビューの趣旨です。

あまり時間もないので、早速質問させていただければと思います。

不動産融資の総量規制というものが90年３月になされており、これがバブルを崩壊させるうえで非常に大きな影響があったと今言われていますが、これについて何か印象に残っていることはありますか。

【加藤】　90年というと平成２年ね。

【原田】　（加藤紘一氏年譜と関連出来事年表を手渡しながら）ここに、その頃起きたいろいろな出来事が整理してあります。

【竹中】　海部内閣のときですね。

【加藤】　（数分間、書類を眺める）86年に自民党政調会長代理になりました。そのときのことはよく覚えていまして、財政の転換にかなり関与しました。伊東正義政調会長で、宮澤大蔵大臣だったように思います。それで、この宮澤大蔵大臣と伊東正義政調会長は誰に仕えたのかな、このとき。伊東正義政調会長のときの総理は誰だったかな。中曽根〔康弘〕さんですね。中曽根さんは行革総理だったんです。それで財政支出を非常に抑制していたんじゃなかったかな。

【竹中】　そうですね、行革をやっていましたから。

【加藤】　彼は総理を４年やったんだけれど、最後に１年おまけで５年目をやった。最後の１年のときに、アメリカかサミットの財務大臣会議か何かで、国内の景気刺激をやってくれと頼まれた。しかし、行革大臣として厳しくやってきた最後の場面を変えたくなかったわけですね。そこで非常に苦吟されて、伊東さんに頼んできた。大蔵大臣宮澤さんもたしか非常に経済を刺激したい、財政出動したいと思っていた。ところが事務当局は、ここでせっかくの財政健全化の路線を崩したくないと言って、宮澤さんの言うことを聞かなかった。宮澤さんと伊東さんの間に日本語の会話が成立しないんですよ。同じ方向を向いていても、なぜか会話が成立しない。そこで僕が、両方に対して調子いいですから、一生懸命両方の通訳をしながら財政出動のほうに持っていくわけです。

ところが当時の事務次官が、えーと、吉野〔良彦〕さん（現在財団法人トラスト60会長）かな。吉野さんの前は誰だっけな、山口〔光秀〕さん（のちに東京証券取引所理事長など）かな。両方とも日比谷（高校）の先輩なんだけど。とにかく吉野さんの説得をしてくれと、宮澤から僕は頼まれるわけです。それで、私の会館の部屋に来てもらって、「やらなきゃいかんのじゃないですか」と言うと、「竹下〔登〕さん（元首相、当時自民党幹事長）たちは反対しますよ。

それでいいのですか」なんてすごまれたのを覚えています。ああ、大蔵官僚というのは政治的な脅迫もするんだなと（笑）。

それで、ここからバブルが発生していくのかな。

【竹中】 そうですね。当時は円高不況で大変だという話があって。

【加藤】 そうそう。

【竹中】 燕三条市の食器が輸出できなくてどうしてくれるんだとかそういう話がありましてですね……。

【加藤】 そういう話を僕ら政党側はしているわけだね。

【竹中】 そうですね。政党側は大蔵省に対策を講じることを強く求めていました。大蔵大臣が宮澤さんに替わられて、宮澤大蔵大臣は今おっしゃったようにもともと財政出動に積極的な考えの持ち主でいらっしゃいました。それに対して事務当局側は、財政再建が重要であると消極的な態度を取っている状況でした。最終的に87年2月にルーブル合意というG7蔵相・中央銀行総裁会議がパリでありまして、そこで日本は景気対策をやりますと宣言させられます。

【加藤】 87年にね。

【竹中】 87年、すなわち昭和62年2月です。それで自民党は、それ、対外公約になったのだから対策を講ぜよという話をするようになり、6兆円の緊急経済対策というものが組まれて、補正予算を提出して、補正予算は87年（昭和62年）7月に成立します。（緊急経済対策が決まったのが5月）

そこにはタイムラグがありまして、補正というかたちで国会審議をして、お金が実際に出るのは対策を組まれてからかなりあとになりますね。87年には既に景気はかなり回復していたのに、そこに補正がドーンと出た。景気が既に良いところに結果として財政出動をしたことが、バブルの一要因となったことは言われています。

【原田】 エコノミストによって説は多少違いますが、86～87年までは好況になりつつあるのに多少タイミングを間違って財政出動してしまったかもしれませんが、そのときはまだバブルというほどでもなかったという認識だと思います。87年10月にブラックマンデーがあって、金融緩和を継続します。ブラックマンデー以前から、景気は回復したのだから、金融も引き締めないといけないし、財政出動もやめようと言っていたけれども、ブラックマンデーがあって金融を引き締めるタイミングを失ってしまった。結局、2年以上にわたって2・5％の公定歩合で過大な金融緩和をしてしまったためにバブルになったのではないかと言われています。

ですから、86～87年の財政拡大は良くはなかったけれども、それがバブルを起こしたというほどでもないのではないかというのが普通の見方だと思います。

【加藤】 吉野さんなどが反対しに来たときの理由は、「黙っていても景気はこのまま回復しますから」と言っていた。それから、そのとき斎藤次郎（のちに大蔵事務次官、現在日本郵政社長）は何をやっていただろう。

【竹中】 主計局次長ぐらいでしょうか。

【加藤】 そうだよね。そのあと経企庁の官房長ぐらいになるんだね。吉野さんとやりとりしていると、主計局次長みたいなのが自民党政調会長代理ぐらいのカウンターパートみたいにして日参するわけだ。それで斎藤次郎という人物との討議で、「ボトルネックインフレが起きますよ。やらないほうがいいです」と言っていた。でも、自民党は、党の声があるし、宮澤さんがそうだし、そこで突っ走っ

て行ったわけです。

そうして選挙区に帰ってみたら、3～4ヵ月で既に、地元の業者がうちの後援会の会員で、農業用水の水門をつくったり設置したりするメーカー兼設置業者みたいなのがいて、これが「あちこちでポンプの仕事が出ました。先生たちのおかげで景気が良くなりました」と言った。だから、へえ、こんなに早く効果が出るのか。アナウンス効果だけでもここまで良くなるのか、と思った。考えてみるとそれが、効果が出始めている、「黙っていても」の流れだったのかもしれない。

それからしばらくして、経企庁官房長になった斎藤次郎氏にどこかで会って、「いやあ、あのときはいろいろ強引なことを言って悪かったね。でも考えてみると、あなたが言ったボトルネックインフレみたいなものがあちらこちらに見えるようになったのかな」と僕が言ったら、「いや、あれはあれでよかったんじゃないでしょうか。いいですよ、ここから先はわれわれが調整していきますから」と美しいことをおっしゃる（笑）。ほう、官僚の皆さんも対応の変化が見事なものだな、と思った会話を覚えています。だから、そこは明らかに政治のほうが一押ししたのが要因ではあったかもしれないと思っています。

それで、90年のときは何をやっていたんだろう。

【竹中】　90年は総選挙が2月にありまして、海部〔俊樹〕内閣で、大蔵大臣は橋本〔龍太郎〕さん（のちに首相）でした。このころはもうバブルになっておりまして、地価が上昇してどうしてくれるのかということが世の中では言われていましたが、そういうことについて印象に残っていることはありますか。要は、サラリーマンがマイホームを夢見ているはずなのに、それが一生絶対に実現できないぐらい土地の値段が上がってしまっている。新聞を読むと、そういうことがかなり問題になっていて、党内でもそういうことを問題視している話が書かれていますが、そういった印象はありましたか。

【加藤】　確かにあったけれども、あまり詳しく自分がそれにどう関与したかは覚えていません。

【竹中】　わかりました。

宮澤総理の経済危機意識

【竹中】　海部内閣が退陣したあと宮澤内閣が成立して（91年11月）、先生は官房長官を務められます。宮澤総理は経済情勢について、92年ぐらいになると、景気がかなり悪くなってきている根っこには、バブル時代にさんざん行った融資がこげつき、銀行が不良債権を抱えるようになり、それが経営を圧迫していることにかなり危機感を持っていたと新聞などには報道されています。当時官房長官をされていて総理と接するなかで、総理がどういうことを問題意識として持っておられましたか。

【加藤】　これは専権事項でしてね、やはり「経済は私だ」という意識がある。そうでしょうと僕も思うから、（てのひらを上に向け頭の上に上げて）「これ、すべてお任せ」という感じでした。僕はPKO法案を通すとかそういう政治的なこと、特に小沢〔一郎〕さん（当時経世会会長代行、現在民主党幹事長）が宮澤内閣の足を引っ張っていたわけです。成立と同時に、言うことを聞かない内閣だと。官房長官も「なりたいなら俺に言ってこい」みたいな感じ（笑）。

官房長官って女房だから。それで、宮澤内閣をつくらざるを得ない政治状況は、私と斎藤邦吉（元厚生大臣、自民党幹事長、当時は宮澤派座長で、宮澤内閣成立後は宏池会会長代行）という人と2人でつくったと思っているから。宮澤さんは「あなたに官房長官をお願いします」というようなことは言わないけれども、その前提で全部僕に相談していたわけです。まず事務の副長官を誰にしようかとか何だとか。

だから、そこで「官房長官の人事は俺が決める」みたいなことを言われても、へえとか言ってね。こんなところで頼みに行ったらそのあといろいろな災いが出るというので、一切行かないわけです。でも、「応援をお願いします」と言ったら、「幹事長は出さん」とか「国対委員長は出さん」とか、まあまあ大変なことで。

【竹中】 幹事長は綿貫〔民輔〕さん（のちに衆議院議長、現在国民新党最高顧問）でしたね。

【加藤】 そう。綿貫さんは今でこそ立派だけど、当時は、「えっ？綿貫さん？」という感じだった。そっちのほうばかりやっていたから、経済のことはあまり……。

ただ、覚えているのは、92年の8月か何かに経済がやたらと変になるんだね、株価も。それで宮澤さんは、「加藤さん、何かがあったら下りて来ますから」と言い残して軽井沢の山の上に行っちゃうわけです。それで山の上から下を見ていたようだけれども。

当時、野村総研が、金融が大変な状況になっているという分厚い報告書を作って、一番最初に私らのところに届けてきた。ああ、これはきっと宮澤さんのところにも届いているんだなと思っていました。こっちは素人だし、まあまあぺらぺらっとめくってみて、なんだか大変だなあと思ったのは覚えています。

【竹中】 山の上に行かれた宮澤総理はそのとき、株価の下落がとまらないので、下りてきて東京証券取引所を閉めて何らかの対策をしたいという考えを、大蔵省というか中島〔義雄〕秘書官に言ったと言われていて、新聞でもその後報道されています。そういったことについて何か印象に残っていることはありますか。

【加藤】 総理と秘書官室で何かやっているなという感じはしましたけれどね。大蔵省の人というのは、こういうマクロ経済・金融、特に金融をほかの省の人間、特に自民党の代議士なんかに知らせることはインサイダーで危ないぐらいに思っているので、話をしないんですよ。そうするとこっちも、「ああ、じゃあ、やっていれば？」みたいな（笑）。

絶対にサンクチュアリです。財政となると、主計は説得しなきゃならないから相談するけれど、金融はサンクチュアリですよ。大蔵省出身の政治家ならまだ話してもいいかなと思いながらも、その中でも半分以上は、「あれは先輩であり金融もわかっていたりするが、話をするとすぐにしゃべる。相場に影響を与える。それにインサイダーをやりかねない」ぐらいに選別していくわけです。ましてや外務省出身の政治家（である私）なんか冗談じゃないという、そんな感じですよね。

【竹中】 そうですか（笑）。そのあと、宮澤総理と平岩〔外四〕経団連会長が会談をされます。

【加藤】 あれはよく覚えています。あれだけはなぜか宮澤さん、「これから平岩さんと会うけれど同道願いたい」と。つまりアリバイ証言者として僕を呼んで行ったんです。ホテルオークラの16階の

何の部屋かな。エレベーターを降りて右に曲がっていくと小部屋が幾つか並んでいるんだけど、大使館側の一番最初の部屋。平岩さんと宮澤さんと私だけ。あと、秘書官もいなかったように思うなあ。いたかなあ。

【竹中】　そこではどんな話し合いがなされたのですか。

【加藤】　だから、公的資金の注入を考えなきゃならんと思うほど危機的な状態だと思うが、いかがかと。それに対して平岩さんが、それはわかるけれども、経済界、特に実業界には、金融界に対する不満とか不信の念が渦巻いている。そこで、経済界全体としては、金融界に対する公的資金の導入については極めて慎重であってほしいと申し上げる。こういうことでした。わかって呼んで、わかってしゃべって、わかって拒否されたんじゃないかな、あれは。

【竹中】　そういうことを言う人もいますね。そういうことを言ったらたぶん拒否されるだろうなと。しかしながら、とりあえず聞いてみようかという感じだと。

【加藤】　「いや、でも、平岩さん、そうじゃないんです。この局面には絶対に必要なんです」というようなことは言わなかった。

【竹中】　平岩さんにそう言われて、総理は「ああ、そうですか」ということですか。

【加藤】　「ああ、そうですか」。

【竹中】　ただ、総理はこのころ相当危機感を持たれていたようで、これは当時新聞で報道されましたが、夏に軽井沢セミナーというものを自民党が開いています。そこで、金融の不良債権問題はかなり深刻なので、場合によっては問題解決のために「公的援助」という言い方をされます。「公的援助をすることもやぶさかではない」と。

【加藤】　そうね。平岩さんのときに何と言ったか。銀行に「資本注入」という言葉だったかな。何だったんだろう。「資本注入」まではいかず、「公的資金の導入」ぐらいだったかな。覚えていません。

【竹中】　軽井沢セミナーで「公的援助」の発言をされたことに関しては、何か印象に残っていることはありますか。

【加藤】　報道でみて、ああ、同じラインだなと。

自民党政治家とマクロ経済の関係

【竹中】　当時、党内で日本の景気についてどういう議論がなされていたかということについて、印象に残っていることはありますか。

【加藤】　確かに景気が悪くなっているから、経済対策を打てと。そのためには、公共事業だけではなくて、その他施設、つまり土木じゃなくて建物は何かの効果があるはずだし、その中に入れる機材、特に学校にパソコンを入れるというのが良い政策ではないか、みたいな議論をしていたと思います。

　それを、森喜朗さん(のちに首相)は当時何だろう、政調会長じゃないかな。それを一生懸命やっていて、経産省もそれに乗っていたと思います。ところが財務省は、それは一部特定業種の利益になると言って強烈に反対した。それを当時、新公共事業みたいな何かと言っていた。

【竹中】　そうですね、公共事業の定義を拡大して、コンピューターを買ってもそれは公共事業なんだ、という議論が一時期ありました。

【加藤】　新社会資本だったかな、何か言っていたような気がします

よ。

【竹中】 繰り返しになりますが、大蔵省は確かに銀行の情報を政治家に伝えたがらない、特に個別金融機関、どこどこの銀行がどうのこうのという話は絶対にしたがらないという話はよく言われて、今もご指摘があったことです。ただ、政治家の方のネットワークは非常に幅広いものがあって、特に自分の選挙区でどういうことが起きているかということについては、かなりアンテナを張っていらっしゃるのではないかと思います。

【加藤】 そう思います。

【竹中】 そうであれば、例えば地場の信用組合の理事長さんや相互銀行の方々とのおつきあいの中から、足もとの金融で何か起きているということを感づかれている方は、党内にはあまりいらっしゃらなかったのでしょうか。

【加藤】 うーん、それはいたと思いますね。

【竹中】 具体的な額がどうこうということではなくて、印象として、理事長さんと話して、バブルのときにやり過ぎちゃったというような話を聞いたりされている方は、どうなんでしょうか。

【加藤】 うーん、そういう話は、よっぽど地元の信金・信組の理事長とその地元代議士との信頼関係があればしゃべるけれど、地元とてそれは一種の個別企業のプライバシーみたいなもので情報漏洩みたいになるから、銀行屋さんが慎重なんですよね。

それで、繰り返すけども、政治家が金融にまで口出ししちゃいかんのだという思いがあるから、遠慮しているところがある。しかし、日本経済全体、マクロから見ても大変なことが起きている。その地元で起きている一つの例がこれだという位置づけがその政治家にできれば、「おい、銀行局長、俺のところでこういうことが起き始めたが、ほかでもあるはずだし、それは生やさしい話じゃないと思うよ」みたいなことが言える。そういうことを言える自信のある人は少なかったんです。

戦後今日まで、マクロの経済運営は、まあ誰かが考えるものだ。たぶん、我々政治家とは別に、暮夜ひそかに赤坂4丁目あたりの日銀氷川寮か何かに（正式名称は日銀氷川分館。住所は赤坂4丁目ではなく6丁目）大蔵事務次官と日銀総裁と通産省の次官が集まって何か秘策を考えて、それを僕らのところにある日言ってくるものだ。それを我々がちょっと色づけしながら、パフォームしながら実行していくという、漠然とした信頼感があるわけです。

そういうのがバブルのあたりから崩れ始めたわけですね。さりとて急に、「だから、あんた、政治家はリーダーシップを」なんて言ったって、「そりゃないよな」と（笑）。

【原田】 でも、宮澤さんは自分こそがわかっていると思っておられるわけですから、当然ご自分はリーダーシップをとらないといけないと思っておられるわけですね。

【加藤】 いけないと思っているわけです。

その前に85年にプラザ〔合意〕がありますね。あのときの話は有名だけれども。竹下さん（当時は大蔵大臣）が宅配便のトラックか何かに乗って隠れて成田から行って、という自慢話があるんだ。帰って来て、首相官邸の大食堂で政府与党の主要メンバーに報告するんです。中曾根さん（当時首相）がいた。安倍晋太郎がいた。竹下さんがいた。宮澤さんはその当時自民党の経済調査会長か何か（プラザ合意当時は自民党総務会長）で、普通の人ならある種の閑

職だけれども、彼は彼でこのポジションは重要だし面白いというような位置づけをしていたわけです。

そのときには、宮澤、安倍、竹下で、もうじき終わる中曾根の後継は誰なんだろうという、安竹宮（あんちくみや）の戦争に入っていたときです。

僕は防衛庁長官としてその会議に入っていた。後ろにはダーッと長官や大臣秘書官なんかがいた。そうねえ、テーブルについているのは40人、おつきが40～60人みたいなところで、宮澤さんが竹下さんに、「竹下さん、あなた、自分が何をやってきたのかわかっているんですか」と面罵するわけです。当時、僕は宮澤派の事務総長みたいなものでしたが、空気がしらーっとしてね。プラザ合意の持つ意味なんていうのは、当時みんなよくわかっていないから。なんだか知らないけど難しいことを言って、あれだけの人数の前で自分のライバルをあれだけ侮辱した宮澤というのは、もう政治家としておしまいだな。次は宮澤ということはあり得ないと、そのときみんな思った。

【竹中】 わかりました。それはよく言われているところで……。

【加藤】 うん、よく言われている。

【竹中】 しかし、今から見ると、結果として宮澤さんはやはり正しかったということですね（笑）。

【加藤】 正しかったんだよねえ。そのうち、中国で一番良いホテルは釣魚台国賓館だから、釣魚台アグリーメント。ね、1ドル＝3人民元ぐらい（笑）。

住専問題

【竹中】 住専処理についてもお話をお伺いしたいと思います。話がちょっと飛びまして、自社さ（自民党、社会党、さきがけ）の連立内閣が成立して（94年6月）、そのとき政務調査会長になられていると思います（同7月）。西野〔智彦〕さんから取材を受けられたと思いますが、西野さんの本（『検証経済暗雲』２００３年７月、岩波書店）には、加藤先生は住専処理についてかなり前向きであったと書いてあります。西村〔吉正〕銀行局長の背中を押して、これは自分が政調会長であるあいだに決着を着けたい、というようなことまでおっしゃったと。住専の問題はいつ頃から意識されましたか。

【加藤】 うーん、いつ頃からガーンと意識したということでもないんですね。言われるように、金融というのは我々が手をつけてはいけない分野だと思っていた。でも、一政治家としてそろそろ勉強しなきゃならんと思っていて、勉強会を始めるわけです。そこには日債銀の西川〔彰治〕君、彼は副頭取まで行って最後にダメになったんだね。あいつも裁判に引っ張り出されたのかな。東大の1年下の男なんだ。それから、無くなった証券会社は何だっけ？

【原田・竹中】 山一です。

【加藤】 山一の人もいたし、大蔵の金融関係の係長クラスなんかもいて、3、4ヵ月おきに何回か、九段の寿司屋、喜与し鮨の2階で勉強をやっていました。なんだかワアワア言っているうちに、難しいなあと思いながら少しずつ知識が入ってきた。それで、住専の処理をしなきゃなりませんというのは、役所から来た話だったと思い

ます。「いいでしょう、いいでしょう」と。

【竹中】 「いいでしょう」というのは？

【原田】 「やっていい」ということですか。

【加藤】 「いろいろな処理をしていくから」と。よくわからないし、役所の金融関係の人たちがやると言うから、「いいでしょう」と。最後に７６５０億だっけ？

【竹中】 ６８５０億です。

【加藤】 全く違うな（笑）。６８５０億の話も、なんか年の暮れの忙しいときに篠沢〔恭助〕さん（当時大蔵事務次官だったが、年明け早々に退任、現在資本市場研究会理事長）が来たかなあ。誰かが来て、「これはもうせざるを得ないですから」と。僕はそのとき政調会長か幹事長だった。

【竹中】 幹事長ですね。

【加藤】 幹事長か。「ああ、そうですか。いいでしょう」と書類をしっかり読むことなく承認印を押した。篠沢さんだったかなあ。涌井〔洋治〕（当時官房長、現在ＪＴ会長）だったかなあ。うーん、２人で来たかなあ。それで、ああ、大蔵省は、いざ役所全体を巻き込むような話になると、最終的には主計が出てくるんだ、ほう、と思ってそっちのほうに興味があった。

【原田】 そのときは、国会であのように紛糾することは予想しておられなかったのですか。

【加藤】 予想していないですよ。後で僕がそれをやって、何かどこかの利権に絡んでいるみたいな証人喚問みたいなものをされたけれど。ちょっと別のほうに話があって呼ばれたりしたけれど、何でもかんでも……。当時自社さというもののまとめは「三幹三政」といって、３幹事長、３政調会長。僕は、政調会長を１年、幹事長を３年やっていたから、言うなれば自社さ体制の要だったんです。だから小沢一郎さんたちは、加藤をやっつければ崩壊すると思っていたんじゃないですか。

【竹中】 お寿司屋さんでの勉強会は、94年あたり、自社さになってからですか。

【加藤】 いや、その前でしょう。

【竹中】 では、自民党が下野している頃からですか。

【加藤】 忘れたけどね、広瀬さんという人も。

【竹中】 通産省ですか。

【加藤】 通産省だっけ？

【竹中】 広瀬さんという方は、通産省の官房長から次官まで行った方がいらっしゃいますね。（広瀬勝貞氏、現在大分県知事）

【加藤】 ああ、あの広瀬じゃなくてね。役所から日債銀に行った広瀬さんっていない？

【竹中】 すみません、窪田〔弘〕さん（元国税庁長官、元日債銀頭取・会長）が行かれたのは知っていますが。

【加藤】 窪田さんが行くずうっと前。たしか大蔵の金融関係の課長をして、それから日債銀に行った。（広瀬勝・元副頭取、元大蔵省官房審議官）

【竹中】 その勉強会のテーマは、住専のみならず金融全般ということですか。

【加藤】 金融全般で、住専の話はないですよ。

住専と農林系金融機関

【竹中】　農林系金融機関の農林中金とか、その下にぶら下がっている信連とかの、住専との関係を意識されたのはいつ頃ですか。

【加藤】　意識したのはね、角道〔謙一〕さん（当時農林中金理事長）と僕は仲が良かったんです。農林族の幹部でしょう。それで、角道さんは農林事務次官を終わったあとに、農林系団体の取りまとめ役になるわけです。住専の問題があって、そのなかで（農林）中金が非常に苦しい立場になっているというあたりの説明は、角道さんから受けました。で、「よろしく」と。

それで僕はその後、勉強会に西村君も入っていたかもしれない、最後の1、2回。ああ、違う、違う、小山ですよ。

【竹中】　小山さんですか、審議官ですね。

【加藤】　その後（ルーマニア）大使になった。

【竹中】　その方は大蔵省の方ですか。

【加藤】　うん、大蔵省の銀行局長になるはずだった小山〔嘉昭〕（現在全国信用組合連合会理事長）ですよ。そうだ、その小山と、広瀬さんという大蔵省から行って日債銀、あとは、日債銀にもともといた生え抜きの僕の同級生、日債銀エリート、そういうので勉強した。うん、小山とはずうっと何度もやっていました。そうこうしているうちに、小山が課長（銀行局調査課長・銀行課長）みたいなところから筆頭課長（同局総務課長）みたいになって、次長ぐらい（理財局次長）まで行くのかな。

【竹中】　そうですね、審議官もやられています。

【加藤】　審議官ね。それが今度、いよいよバブル処理に入っていくわけです。（小山は）そのとき中心人物になるけれども、勉強会ではバブルが大変なことになるということを僕に教えたのかもしれない。ただ、僕がわからなかったんじゃないですかね（笑）。やっているうちに小山がガーッと動き出す。そういうなかで、「おい、大変だな」と。党本部で金融関係の会合があると、そこに行くエレベーターで会ったりするわけです。それで、「農林中金が大変です」ぐらいのことを彼は俺に言ったと思う、僕が農林族ということを知っているから。「ああ、そうか。じゃあよろしくね」ぐらい。

（加藤氏中座）

【竹中】　角道さんから農林系金融機関の話が出たのは、いつ頃ですか。

【加藤】　それが問題になったとき、これから問題になりそうだ、いや、問題になった。で、メディアにちらちらと出始めたような頃に僕の部屋に来ました。

【竹中】　そうすると政務調査会長の頃でしょうか。

【加藤】　幹事長1年目か政調会長の頃じゃないでしょうか。

【竹中】　繰り返しになりますが、政務調査会長のときには、西村銀行局長がやりたいとおっしゃるのでそれにお墨付きを与えたというか、じゃあ、どうぞ、という感じだったと。

【加藤】　問題点の指摘だけだったね。それで公的資金を入れるという話が初めて来たのが、その年の12月中旬だったように思う。

【竹中】　そうですか。

教えていただきたいのは、ジャーナリストの書いたものによれば、自民党の農林族と言われている方々が、主計局の人たちが加藤幹事長のところに現われる前に既に大蔵省にかなりプレッシャーを

かけていたそうです。

【加藤】 ええ？そうだろうか？

【竹中】 ネタ本は西野さんの本ですが、柳澤伯夫先生（のちに厚生労働・金融再生担当大臣、旧大蔵省出身、95年12月当時は自民党総合農政調査会・系統金融プロジェクトチーム座長、現在城西国際大学学長）、あるいは松岡〔利勝〕先生（のちに農林水産大臣、95年12月当時は農林水産政務次官）など、農林族幹部の方が西村さんと6人ぐらいで会談する場面が書かれていて、そこで農林族の方々が、「おい、それで最終的にいったい幾ら出すんだ」と西村さんに迫ったそうです。西村さんはそれが何のことやらわからず、農林族の人たちが、「今の銀行局長は公的資金のことを全然考えていないのか」ということで、主計局に電話をして、「いったいどうなっているんだ」と主計局に激しくプレッシャーをかけ、主計局は、「そんなことになっているのか」と慌てふためいて動いたと……。

【加藤】 あり得ますね（笑）。あり得るというか、公的資金の導入でなければダメだということを考えたのはたぶん、角道さんじゃないかな。あの人はなんとか金融課長もやっていないかな、若い頃。

【竹中】 農水のほうでやっているのかもしれませんね。

【加藤】 農水で。

【竹中】 住専と農林系金融機関の関係は、今は常に取り沙汰されています。住専の経営がまずくなっているというのは、平成4年の頃、宮澤内閣の頃から既に問題になっていて、そこでは農林系金融機関を優遇するようなかたちで再建策が作られています。例えば、いろいろな金融機関が住専にお金を貸しているわけですが、住専の経営状態が非常に苦しくなったので、普通の銀行には「金利をゼロにしてもらいます」と。しかし、そういったなかでも、農林系機関には「ほとんど元通りの金利をお支払いします」とか、そういうかたちで……。

【加藤】 母体行じゃないからね。いや、だんだん思い出してきました。母体行論だったんだね。三和が三和住専を面倒見るのは当たり前じゃないか。我々は単に純粋な金融取引でやったのであって、その結果、農民の単協が3億、2億飛ぶというのは許せない。そんなものは銀行屋のやったこっちゃないか。そういう感覚はあります。角道さんがそうやって説明していたと思う。「そうだよな、そうだよな。銀行はいつも悪いんだ」と（笑）。

【竹中】 そういう感じですか。

大蔵省銀行局長・農林水産省経済局長の覚書（1993年2月3日付）

【竹中】 住専を処理するときに、大蔵省銀行局長と農林水産省経済局長との間で覚書というものが交わされていました。

【加藤】 ありましたね。

【竹中】 これについて印象に残っていることはありますか。国会で住専処理が議論されたときに明るみに出て、大もめにもめるわけですが。

【加藤】 あれはどういう取り決めだったかな。

【竹中】 最終的に住専の処理を決めたときではなくて、それ以前に住専の経営が悪化したときに、母体行の金利を一番安くして、普通の銀行の金利を中くらいに安くして、農林系金融機関に関してはほ

とんど……。

【加藤】　元通り払うと。

【竹中】　今後住専を再建していく際には、こういうかたちで確実にやりますと。

【加藤】　やりますと。寺村〔信行〕局長だった。

【竹中】　そうです。

【加藤】　だんだん思い出してきた。農林水産省は誰だったのかな。

【堀】　眞鍋〔武紀〕さん（現在香川県知事）です。

【加藤】　眞鍋〔武紀〕か。経済局長。至極当然だなと農林族は思いましたよ。

【竹中】　至極当然だなと思ったのは、明るみに出たときですか。それとも、農林水産省は如才なく、その覚書を結ぶ段階で既に農林族の方と相談されていたのでしょうか。

【加藤】　多分ないでしょう。あるとすれば柳澤氏だけだけど、そんな母体行だとか住専だとか、そのもの自体がわかっていないんだから。後世というか、あの事件がワアッとなってからは、大変なことでしたからわかったけれど。しかし、普通の政治家は「住専って何だ？」という時代ですからね。

【竹中】　普通の政治家の方は、住専の経営悪化問題が注目を集めるようになったときはそうかもしれませんが、それ以前は農林系金融機関の経営状態に関心を……。

【加藤】　思わない。ほとんど関係ない。

【竹中】　いろいろな説があって、「なんでこのときに優遇したんですか？」と言うと、「それは農林族がいるからだよ」と答えられる方もいて、どういう計算でこういう覚書が結ばれたのかなということがなかなか……。

【加藤】　その覚書が結ばれたときには、族には説明はなかったと思うし、説明があったとしてもわからん。めくら判。

【原田】　普通、覚書を政治家に説明するということはおそらくないと思いますが。

【加藤】　ない。そういうときにあるとしたら、「政治家の中で農林族の中で特別に金融問題をわかるから、せめて柳澤先生ぐらいには、ちょっと局長、言っておいたほうがいいよ。それ以外はちんぷんかんぷんであるし、しゃべったら、変に覚えていて変にしゃべられて市場に影響したらどうするんだ」なんて、そんな会話なんじゃないかな（笑）。

【竹中】　確かにそんな感じかもしれませんね。柳澤先生は金融もわかっておられるし。

【加藤】　柳澤さんにこのくだりを聞いたらいい。

【竹中】　西野さんの本によれば、政調会長をやられているあいだに、加藤先生が公的資金を入れてでも住専を処理することに関してかなりの指示を西村局長に与えてくださったので、それを心強く思って処理を進めたけれども、そのあと加藤先生が幹事長になられて、政調会長から離れてしまわれたのが結構痛かったと書かれています。

公的資金導入への同意

【加藤】　西野さんは僕をあの金融プロセスの中でかなり主役風に書いて、過大評価している（笑）。同時に彼は大蔵に食い込んでいる

から、これはある意味で、大蔵が公的資金導入に農林族のパワーの存在を利用しているところが多分にあるんですよ。僕が政調会長、それから自社さ3党の要にいた。で、農林族の完璧なリーダーですから。

【竹中】 その方がまとめてくださるのではないかと。西野さんはそんな感じで書かれていますね。

【加藤】 うん。

僕の感じは、説明を受けたからいいよと。しかし、まあ1人の政治家として、幹事長だからルーティンとして説明を受けたんだよな、みたいなそんな感じだけど。

【原田】 そうですね、12月の……。

【加藤】 次年度の税制の枠組みが決まって12月15日前後に、篠沢次官と涌井官房長が予算折衝の重要項目である公的資金導入について同意を求めに事前説明に来ました。やっぱり自分が同意を与えたことについての重要性を、あまり認識していないんだね、物がわかっていないから。で、翌年からそれをめぐって、公的資金導入6850億で、審議拒否とかの中心にされていくわけです。

【竹中】 西村銀行局長はどれぐらい頻繁に政調会長室にいらしていましたか。

【加藤】 かなり来ていました。でも、母体行がなんぼで、農林がなんぼでという、全体像で来ているんです。

【竹中】 「それでいいんじゃない?」と先生がおっしゃって、彼はこれで大丈夫だなと思って。

【加藤】 「わかりました、いいでしょう」と言ったから、わかっていようがわかっていまいが、僕が同意を与えたことは事実ですから。幹事長だったのかな。投入を決定したのは何年ですか。

【竹中】 投入を決定したのは95年（平成7年）の12月です。幹事長になられたのが95年9月ですから。

【加藤】 幹事長としてオーケーしていますね。

【竹中】 ただ、住専の処理の話はもう少し前から西野さんは進めようと考えておられたので、政務調査会長の頃から相談にいらしていたのではないかという感じがします。

【加藤】 うん、よく来ていたと思います。

政治家とマクロの金融政策・日銀とのかかわり

【原田】 また違う発想の質問ですが、バブルが起きたのは、財政、金融両面からやり過ぎたからで、そのあと、金融政策を非常に厳しくしてバブルをつぶして、資産価格が非常に下がっていった。ですから、今度は逆に、金融政策を拡大すれば、資産価格の下落も止まって、不良債権処理も楽になるのではないかという発想は、90年代最初の頃、政治家にはなかったでしょうか。

【加藤】 まあ、我々の専門家筋の柳澤とか、あとは誰がいたろう。

【原田】 浜田卓二郎先生はそうおっしゃっていました。

【加藤】 ああ、そうそう、官房長官をやっていても、浜田卓二郎が総理のところによく入っていて、「宮澤政権の経済政策、マクロは私と宮澤でやります」みたいなそんな感じでした。そこでどういう議論になっていたのかよく知りません。

【竹中】 そのことや今の経済情勢とも関連しますが、政治家の方々は、日本銀行の金融政策に関しては、一時期すごいことをおっ

しゃった官房長官もいらっしゃいましたが、そこに直接働きかけようという発想はあまりないという感じですか。

【加藤】 日銀にはないですよ。もちろんゼロですよ。

【原田】 金丸信さん（当時は自民党副総裁）が、92年2月に日銀総裁の首を切っても公定歩合を引き下げろと発言したことがありますが、基本的にはそういう発想はないということですか。政治家は日本銀行なり大蔵省を専門家として信頼して、マクロのことはちゃんとやってくれると考えていたということですね。

【加藤】 そう。金丸さんみたいな人がときたま出るわけです。それで、そういうかなり強いダイナミックな大胆なことを言うと、「あっ、陰に誰かがいるな。あのおじさんがわかるわけがないのに、あんなことをしゃべって」とこうなるわけです。大丈夫なのかなあと。民間のエコノミストか、どこかの財界のお偉方か、ないしは大蔵省出身の政治家の特定のヤツか、誰か陰にいるなと、こうなるわけです。

【竹中】 マクロの金融政策にはあまりご関心がないのでしょうか。

【加藤】 ないですね。だって許されていないもの。

最近はあるよ。最近は、僕らはあるから、例えば金融政策をしゃべるというと山本幸三（旧大蔵省出身）。でも、あれもやたらと日銀の悪口ばっかり言ってるな、偏っているんじゃないのとか思ったり。そういう議論はあります。

しかし全般的に、日本の社会はマクロ・エコノミー・ストラテジーを立てる人がなく進んできている社会じゃないんですか？うまくいったときはずっとうまくいったが、今ダメになって立て直そうとすると誰もいないと。

中国の世界経済認識

【加藤】 余計な話ですが、私が08年、日中友好協会の会長として就任したものだから、リーマンブラザーズの（破綻の）1週間前、08年9月7日、北京に行って胡錦涛（国家主席）と1時間会った。その前々日、6者会談の話を聞くために外務次官の武大偉と1時間会ったんです。帰りがけに、「明後日胡錦涛と会うが、国際金融の大波乱が近々来るかもしれん。そのときに日本はどうすべきか、中国はどうするつもりかを胡錦涛と話したい。極めて狭い限定的な専門的な話かもしれないので、胡錦涛にブリーフィングペーパーを上げておいてくれ」と言ったら、即座に「そんなものは要りません。胡錦涛は今、時間があれば国際金融問題を勉強している。外務省なんかのペーパーは恥ずかしくて上げられないぐらい彼は専門的になっています。だから思う存分話してやってください」と言うんですよ。それが9月7日で、リーマンが9月15日ぐらいだから、ある意味では万全の構えをしていたんだと思います。

僕は会談の最後の10分、「世界金融事情を見ると、いずれアメリカから大変な金融危機の波が押し寄せてくる。そのときに助けてあげられるのは、2兆ドルの外貨を持っている中国、1兆ドルの日本、それから2兆ドルほど持っている湾岸産油国地域、この三つしかないと思うんだが、中国はどうする？我々日本は、うーん、国内政治的にはいろいろな困難なことがあるが、やはりアメリカを助けて、マクロ経済の安定とドルの安定には協力しなきゃならんと思う」と言ったら、「まったくその通りだ。我々中国は、アメリカ、

日本、その他の国と協力して、世界経済安定のためにできる限りのことをしなきゃならんと思っています」。こう言いました。

終わってからすぐ関係者で飯を食ったんだけど、その飯食いの場に、中日友好協会（秘書長）のイエンミンタオ（袁敏道）という男がなかなか帰ってこないんです。「どうした？」と言ったら、会談が終わってから胡錦涛が控えの間にいて、「今、加藤と話したことの意味は」と言って興奮して、「やっぱり我々が考えていたのと同じようなことを加藤も考えている。今日の会談は勇気づけられた」と言って15分ぐらい雑談していたものだから、と言っていました。

僕がなぜそんな質問をしたかというと、僕にあんちょこ係がいるから（笑）。中前忠さん（中前国際経済研究所代表）なんだけど。彼（から）はいろいろ過去10年聞いているものだから、その影響なんだけど。その観点で実は、サブプライムの問題が起きたとき、9月より前の7月か何かに、外務省の経済局長や次長とかいろいろな人に、「おい、どうなんだ？　危なくないか？」と言うと、「何の話ですか？」と言われた（笑）。

【原田】 役人の話しか聞いていない方は、「蚊に刺されたぐらい」と言ってしまったわけですね。

【加藤】 言っちゃったんだよ、与謝野〔馨〕さんがね。

【竹中】 わかりました、マクロは弱いと。

【加藤】 だから、世界経済の中のデレバレッジは何も進んでいないでしょう。

【原田】 不良債権の処理などはアメリカではかなり進んでいると思います。

【加藤】 そうですか。

【原田】 実際に貯蓄率が上がって、日本より今現在はアメリカのほうが、家計貯蓄率が高くなっています。

【加藤】 瞬時はね。

【原田】 ですから、アメリカはソフトランディングするのではないかと思います。ヨーロッパのほうはまだわからないです。いろいろな問題が出てきていますので。

【加藤】 79年、サッチャーが政権を執ったときに、ミルトン・フリードマン（元シカゴ大教授、当時フーバー研究所上席研究員、76年ノーベル経済学賞受賞）と（フリードリヒ・フォン・）ハイエク（74年ノーベル経済学賞受賞）なんかがアドバイザーになってマネー経済を持ち込んだ。そのとき、世界実体ＧＮＰの総額が11兆米ドル、金融資産と皆が思ったのが12兆米ドル。それから30年のあいだに今45兆米ドルぐらいですか。それで金融資産は、リーマンの前には１６５兆米ドルまで伸びていた。ここ1年半ぐらいで20兆米ドルぐらいはシュリンクさせたと思うんだけど、まだまだ何か来るような気がしますね。まあ、余計な話だけど。

住専処理と政治的判断

【竹中】 話が元に戻りますが、住専を破綻処理すると、長信銀と信託銀行に影響を与えると。結果として与えたわけですが、そういった議論で何か印象に残っていることはありますか。

【加藤】 母体行として主立ったものが信託銀行だったんじゃないでしょうか、あの当時。どうでしたか。

【原田】 みんなやっていました。

【竹中】　長信銀と信託銀行の一部はかなり貸し付けているんですね。

【加藤】　住専にね。

【原田】　店舗の少ないところが長信銀なので、そこがいっぱいやってしまった。店舗のいっぱいあるところは、自分の持っている資産に比べれば少ないところが多いということです。ですから、信託や長期信用銀行のほうはかなりひどかったと一般的に言われています。そちらへの影響がかなり高いからなかなか処理できなかったのではないかと言っている人もいます。三和銀行は普通の銀行ですから、「自分が母体行として責任をかぶるから早く処理したい」と言っていたのに、行政に反対されてできなかったと言われています。これは本当のことかどうかわかりませんが、そう言っている方もいます。

【加藤】　住専には投入するというドラマが終わったら、あとは政治的な判断はないんですよね。その次に、1～2年したら不良債権問題が出てきて、ああ、この銀行は住専でもより多く怪我していたのかなとか、そのレベルで来たので。

【竹中】　公的資金の６８５０億円の投入というのは確かに大きな政治的判断でしたが、その次の政治的判断は、そうすると、97年秋に山一〔證券〕、北拓（北海道拓殖銀行）、三洋証券、徳陽シティ銀行が連続破綻するということがあり、そのあとに公的資金を注入する話が一気に浮上します。

【加藤】　ありました。そのとき僕は幹事長です。

【竹中】　このときは、これも西野さんの本がソースですが、大蔵省の山口〔公生〕銀行局長（最後の銀行局長、現在金融財政事情研究会理事長）などはむしろ公的資金注入に最後まで消極的だったのに対して、自民党のほうからは、公的資金を入れなきゃどうにもならないだろうという話が、梶山〔静六〕先生（元通産・法務・自治大臣、内閣官房長官、自民党幹事長）などからあったと記されていますが。

【加藤】　まあ、梶山さんは積極的に発言していました。それで、最終的には自分がやるという感じがあったんじゃないでしょうか、司令塔として。しかし、我々中心に梶山さんに対する不信感がありましてね。それは、僕が幹事長として総務会に出席すると、山崎〔拓〕政調会長（現在自民党総合政策研究所所長）、総務会長は誰だったか忘れたけれど（塩川正十郎、現在東洋大総長）、梶山さんがわんわんと失政をなじるわけですよ。こっちは「言っちゃ悪いけど、あなたもこのあいだまで官房長官じゃないか」という思いだった。

資本投入の金額を10兆、20兆とか言うので、それは役所に任せておったのですが、かなり不良債権の処理が難しくなる段階で宮澤さんが登壇してくるんです。それで、「こういう話を幹事長から橋本総理に言ってくれ」ということで僕を絡めながらやっていくと、じゃ、宮澤さんにご指導いただくかということで、宮澤委員会みたいなものができるんです。そこで全部処理をしていったわけです。ここで、「かねて俺の言う通りやっていればもっと安かったのに」みたいな気分で始めるわけです。

バブル処理について

【竹中】　加藤先生は、バブルの処理について、「バブル崩壊後、政

府は緊急経済対策的なカンフル剤を何度も打ってきましたが、一時的な効果しか現れなかった。そのため、抜本的な体質改善を行うには本格的な構造改革が必要だとの認識が政界にも官界、財界にも生まれ、……3、4人の総理大臣を犠牲にしながら10年がかりで進める大仕事」だったとおっしゃっています（http://www.katokoichi.org/database/aj-9905-gen.html）。バブル処理というのはどういうものだったと思われますか。

【加藤】 ある意味では、バブルの発生によって膨大な架空の利益が生じたんですね。おそらく２００兆ぐらい生じたかもしれない。そのうち１００兆ぐらいを取っていったのは、実は公的セクターなんです。

【原田】 税収が増えましたからね。

【加藤】 宮澤さんなんかがある日、私に、自分の計算では少なくとも60兆ぐらいは入っているとか、広く見れば１００兆だとか。そういうものはせめて半分返しぐらいしないと、世の中うまくいかないんじゃないかと思うんです。６８５０億なんて少ないものだし。つまり、税もものすごく甘く使われたし、国債の償還も進んだわけです。そこのマクロは国民に説明しなきゃならないなあという思いでやっていました。

それから佐々波委員会（預金保険機構の緊急危機管理審査委員会：委員長・佐々波楊子慶大［のち明海大］教授）などでは、どうやって公的資金の投入をするかと。東三（とうみつ）（東京三菱銀行）は絶対にイヤだ、要らんと。でも、東三から入れないと、悪いほうから入れたらそこは危ないということになるので、なんぞと思っていたら、ある日、詠み人知らずの見事な手紙が来ました。ワープロでピシーッと書いてあった。こうやってA、B、Cにランク分けしてAから投入すべしと。探せば今でもファイルにあるけど、あれは誰が書いたのかな。おそらく専門家、役所にいた人が書いて……。その紙を僕からどこかに渡して、「これも参考に」と言ったら、だんだんその方向になっていきました。

【原田】 「俺はあのとき特に得していなかった」という国民もいっぱいいますから、半返しといっても説得するのはなかなか難しいですね。

【加藤】 そうね。

【竹中】 そうですね、６８５０億円で説得できなかったわけですから。繰り返しの質問で恐縮ですが、あの６８５０億円を入れると言ったときに、それがそのあとそんなに紛糾するとはやはり思わなかったのですね。

【加藤】 思っていなかった。

【竹中】 予算案がそのまま通ると。

【加藤】 うん。

【竹中】 新進党がそこまでそこを突いてくるとは思わなかったということですか。

【加藤】 思わなかった。これだけの反発が出るとは思わなかった。

【原田】 それは、農水への予算として６８５０億円投入するのであれば通るだろう、ということだったのですか。

【加藤】 これはマクロで考えると、やたらと税金を取ったんだからと思った。そのマクロの話というのはみんなしないけれど、今これだけの低金利で一番得しているのは国家財政ですよね。これだけ安い金利で。

【竹中】　そうですね。もう１～２％高ければ予算が組めないくらいでしょう。赤字国債費だけでも倒れちゃいますから。

【原田】　同時に、景気が悪いから低金利になってしまいますし、景気が悪いから税収も上がらないという両面がありますから、必ずしもそうは言えないと思います。

【加藤】　でも、できれば２・５％ぐらい家計部門の預金に利子がつけば、これで25兆円ぐらいの金が国民の懐に入ります。２５０兆の国民最終消費からいえば約10％、利子課税を考えても８％ぐらいは懐に残る。年寄りは、元金は絶対に使わないけれど利子は使いますよ、余っちゃうということで。

【原田】　インフレになれば名目の金利は上がりますから。

【加藤】　そうそう。

【原田】　インフレになると、みんな錯覚してお金を使うでしょうからね。

【加藤】　使う。中小企業だって、借りている金に２・５％、利子がアップしても、景気が良くなって売上が増えればそんなのものはいい、という意見がほとんどじゃないですか。だから突き詰めていくと、財政が困るから低金利で国債を回したい。ということは、政治家が消費税をちゃんと取って財務に渡せば、利子もちゃんと付けるでしょう。早くそこに戻さないとダメだと思うんですけれどね。これは今後の話。いいですか？

【竹中】　今日は大変興味深いお話をありがとうございました。

【加藤】　政治家なんていうのは、いろいろなことをやっているときに、あんまり物を考えないでやっているんだよね。でも後で考えてみると、大変なことをやっていたんだと。

【原田】　でも、宮澤総理はその点については……。

【加藤】　立派よ。

【原田】　そのときそのときの自分のなさったことについて、明確な記憶がおありになると思いますね。

【加藤】　そうそう。また、本当のことを言うと嫌われるんだよ。ハンディキャップ改正委員会で、33ぐらいだったのを28にしようとか、それで最終的にはシングルまで行ったわけでしょう、８まで。それではフォームが崩れるよ。

【原田・竹中】　どうもありがとうございました。

【加藤】　はい、どうも。

―了―